広告　企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

江戸時代から続く藍染めの里で伝統を受け継ぐ

藍染めに親しみ日本から世界へ

新島　大吾
埼玉／藍染め伝統工芸士

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催：レクサス）は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

本プロジェクトは2016年、プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。以来、全国の若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への指定やロックフェラー家主催のチャリティイベントへの出品、上海での国際的な展示会への出品など、目覚ましい活躍を見せている。

3年目となった今回は、全国47都道府県から計50名の若き匠が選出。昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの制作に取り組んだ。

1月24日、東京ミッドタウン日比谷で行われた発表会では、国内外の百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイン関係者などに向けて自身のプロダクトをプレゼンテーション。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなる大きなチャンスを手にした。

1月24日、プレゼンテーションにて

プレゼンする新島さん

また当日は、2019年の新たな取り組みとして、全国の匠と、世界的クリエイター（コラボレーター）が、新たなプロダクトを制作するコラボレーションプログラムを発表。コラボレーターである隈研吾氏（建築家）、廣川玉枝氏（SOMARTA クリエイティブディレクター）、森永邦彦氏（ANREALAGE／代表取締役社長・デザイナー）、辰野しずか氏（クリエイティブディレクター／プロダクトデザイナー）が登壇し、想いを語った。2019年秋頃には、完成したコラボ作品、過去のプロジェクトから生まれた匠たちの作品を披露するイベントを京都の地で開催することを合わせて発表。プロジェクトも一歩一歩進化している。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。

「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。

LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。

埼玉県選出の匠、藍染め伝統工芸士の新島大吾さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。「進め！電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。執筆活動の他、京都造形芸術大学副学長、地域・企業のアドバイザー、下鴨茶寮主人などを務める。「くまモン」の生みの親でもある。

師匠の美しい藍染めに魅せられて

江戸時代から藍染めの産地として栄えた埼玉県羽生市。最盛期には200以上が軒を連ねたが、現在市内に残る藍染め業者はわずかに4軒。その中で、創業から180年余りに渡って藍を染め続ける、武州中島紺屋の5代目が新島さんだ。

新島さんは幼少の頃、器用にミシンを操る祖母の姿を見て育った。ファッションに興味を抱き文化服装学院技術専攻科を卒業後、都内のバッグメーカーに勤務するも学生時代に出会った4代目、故中島安夫氏が作り出す藍染めの美しさに魅せられ弟子入り。24歳から藍染めの道を歩み始めた。

藍染めは、花が咲く前に刈り取った葉を堆肥状にした「すくも」をぬるま湯の入った甕に入れ、そこに石灰などを加えてアルカリ性にすることで発酵菌が増殖し青みを出す。味や色、泡の状態をこれまでの経験と五感を駆使して見極めて染料を作り出す、まさに匠の仕事だ。

工房に併設された資料館

作品の説明をする新島さん

大人の女性に似合う上質なバッグが完成

今回新島さんが取り組んだプロダクトは、藍染めを施した鹿革を用いたレザーバッグ。藍染めの商品を企画デザインするラ・ジョイアの和田義治さんと試行錯誤を重ねて、10年かけて鹿革の藍染めを完成させた。生駒氏からは、デザインの重要性とパーツなど細部にまでこだわるようにと女性ならではの貴重なアドバイスを受け、新島さんはデザインから裏地や金具の選定まで様々なチャレンジを重ねた。「本物志向の大人の女性に普段使いしてもらえるバッグを目指しました。上質感を出せるよう、ファスナーや縫製など細部までこだわって作りました。藍染めは使えば使うほどに色に深みが出てきますので、長く愛用してもらえたらうれしいです」と話す。

五感を駆使して染め上げる新島さん

エリア・コンサルティングにて

プロダクト製作にあたり、3つの点にこだわったという。ひとつは染色のこだわり。「天然の革は一枚ごとに個性があります。その個性を見極め何度も何度も染め重ねることで味わい深い表情になるのです」と話す。もうひとつは素材へのこだわり。皮革産業が盛んな埼玉県草加市のソフトレザー専門の伊藤産業・伊藤達雄さんが魚油を使用した再なめしを施し、触るたびに癒される極上の手触り感を実現した。3つ目は縫製へのこだわり。革は一度針を入れると穴が開いてしまうため縫い直しがきかない。そこで同じく草加市にあるランドセル専門のメシエ・茂垣隆生さんが、一針一針丁寧に縫い上げ、クオリティの高い作品に仕上げた。新島さんは「鹿革は軽くて柔らかい上に、繊維が密で丈夫。この軽さと柔らかさをぜひ手に取って実感してもらいたい」と話す。全国の匠が一堂に会したプレゼンテーションでは、藍染めの美しさ、鹿皮が持つ軽さと柔らかさ、細部にまでこだわった作品への熱い思いを語った。ブースに立ち寄った方から「すごく軽くて柔らかいですね、感動しました」との言葉をもらい、「今回のコンセプトは伝えられたのかな」と笑顔を見せた。

今まで先代から受け継いだ伝統の技術を磨き上げることにまい進してきた。これまでも和田さんとともに藍染めの新たな可能性を探ってきたが、今回のプロジェクトに参加したことによって、その思いをさらに強くしたという。「全国の匠と交流を深める中で、たくさんの刺激を受けました。作品を作るだけではだめ。作品の良さや作品に込めた思いをいかに自分の言葉で伝えられるか、その大切さを学びました」と今回のプロジェクトを振り返る。

真剣なまなざしで染め具合をチェックする新島さん

自身の仕事と並行して県内の小学生を中心に藍染め体験を指導している。世界に一つだけの染め上がったハンカチを手にする子どもたちの笑顔も、創作意欲を駆り立てるエネルギーのひとつ。「子どものうちから藍染めに慣れ親しむ環境をつくっていきたい。そのためにも日本での認知度を高め、海外でも日本の伝統工芸が愛されるように努力していきたい」。新島さんの挑戦はこれからも続いていく。

完成したプロダクト、鹿革のバッグ3点

新島　大吾
埼玉／藍染め伝統工芸士

埼玉県深谷市生まれ。1837年より続く武州中島紺屋の5代目伝統工芸士。文化服装学院技術専攻科を卒業後、都内のレザーバッグメーカーを経て、藍染め無形文化財技術保持者の4代目、故中島安夫に師事。2012年伝統工芸士取得。文化服装学院課外授業講師。モノづくりや体験教室を通して藍染め文化の振興に努める。

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT